ル 2
3097
10

二拾三四

二十八丁

日本行紀

第二十三篇

下田

死を怖るゝ官人

江戸の眺望

太平

江戸の海濱上の家屋

伊豆

下田の港及ひ市街

日本邑の裏面

3097
18
早稲田大学図書館 昭和26.2.5

人家
錢湯
淨織の反對
寺院
教法

下田の港 千八百五十四年第五月第七日

月末の數日書柬授受の事件も過去ルの後ハ好んて海岸の測量を以て日を送りし而て此事も風雨陰晴ニ拘らすして四月の六日ニハ事畢りし

是レ手を十分ニ齊ひたる故なり○約定の如くなれハ下田の港ハ「伊豆といふ岬ニ近く江戸の海灣より西四五十里ニあり」四月十五日より八亜墨利加船の為ニ開かれて有へしとす○然るニ其地ニ到る前ニ「コムモトル」親ら猶江戸を一見セん事を願ひし是其哨舟此都府より四里の距離の処まてすら猶四十「フート」の深サあることを見知りし故ニ愈ニ然る事ニ至きり○是ニ依て帝國の官人ニ之を報しけれハ官人大ニ驚キけり○是遜恭なる日本の礼儀を服行することハ欲

する所に非すと言ひしに　如此き異國人を帝の
殿上にて接見するハ其意に法外なる粗暴と以
謂へるなり而て官人より吾方へ數多の約定を
為せり是其事を和調せんか為なり譬へバ「コモ
ムトレ」ハ昔年和蘭の王使の如く陸にて江戸へ
至るへし而て拜謁を願ふへしなとなり然るよ
是愷に手ツから指定せる所なり○終に「コムモ
トレ」より已レ唯江戸を眺望する所まて到るへ
しといふ決定せる言により官人無二の答をなす
して着船江戸の壁下に碇を下せし時ハ此に殘り

居る多少の人ハ尽く自殺に至るへし之をよく
弁せん事を請へり
第八日ハ吾か徒志を遂んと定めし日なり然るに
始終言語を以て之を止めんと欲して猶船に來
れり然れとも其碇を上ケ船隊海灣に蒸氣を揚
て溯らんとする時にハ窮編せる日本人驚轉せ
る顔色にて失望の言を始めし○其人頻に吾將
官等に言りけるハ○汝等然らハ実に江戸に行く
乎○汝等其処にて碇を下すや否や○而て其時
吾方より續て答へけるハ○吾等敢て「コムモド

レ」の意志を志しす唯其命令を恪守することを
知る耳○此時終始辞の通りに語を次ぐるは○
否ナ否ナ軍船は江戸に碇すまし「コムモドレ」は善
人なり其寛大の徳必す吾輩の死に至ることを
始まし

午前十時には江戸の眺望の処に到れり○其第
一の人家は大抵海湾の上端半輪形の所の濱に
沿てあり其濱は北邊我こと平行なり○吾艦の左
二當り品川と名くる前邑ありて百二十「フード」
より百五十「フード」までの高サなる段こに積重たる

丘の足（フモト）にあり○從に遠りて造構あり是れ塔の
類よりして日本人の火塔（火の見）と名くる者なり其
形漸殺せる四面の尖柱状にして其下部は横材
のこ他の一物を見す其上部は板を以て之を蓋
へり

千百の小き漁舟及ひ宅の軽き艇（コブネ）は其岸に沿ふ
て雜沓し而て吾方より英吉利法にて大抵三里
と都府よりは一里を距（ヘダ）てたりと見ゆる所都府
と我軍艦との際に當りて幾多の日本船あり凡
二千餘艘ばかり甚大にして碇を下せり考るに是

軍艦なるへし○遼なる眺望の中に於て都府の
人家の上に一ツの丘の見へける其上に種々の極メ
て荘麗にして且廣大なる造構の有るを見得な
り或人之を帝の宮殿なりと云へり○是に至り
て「コモドレ」自ら止りけれハ諸将官皆猶江戸を
一見せんと欲して屋上に登けり是此よりして
前むへからされハなり○半時にして諸艦皆船
を廻らし再ひ海湾を出さりけるハ日本人に仕
てハ此瞬るを過て始て安心の息を呼出すへし
とす其喜ひ挙て謂ふへからさる事を知るへし

此度「コムモドレ」帰を決せしハ此窮縮せる人等
の好ミて從ひ我をして愉悦せしむるとハ雖も然
とも余及ひ佗の諸人をして少間の大なる空想
を費さしめしハ亦免れさる所なり○最初にハ
吾ら徒皆江戸を極めて荘麗にして且ツ廣大なら
とし其次にハ猶此帝都の内に暫く目を送らん
ことを願ひし○然とも吾ら発遣の大眼目ハ既
に達し初皆希ひしよりも猶十分に成就し又其上
に成し遂し事ハ吾黨新聞を好むの意を和解せ
しむるに足けり而て其事ハ実に罪なき諸人の

死を以て償ひたるなり何となれハ日本の官人
最後ニ誠実を尽し吾ヵ彼ニ衝めて江戸ニ碇す
ハ已レ等辱しき死罪を受けて直ニ其腹を切る
儀なりと言へハなり○加之もし帰を決する
事のあらまりし時ニハ如此く宮廷よる願を棄
て日本人を壓倒し且挑怒して恐らくハ其感ニ
因り長く彼我両國の間ニ間隔の橋を作るニ
も至るへし

此日猶午後ニ吾ヵ前年碇を下せし「亜墨利加
の埠頭(フナカヽリ)」処ニ帰り行き而て數日の后ハ猶復海湾の

遠近水の淺深を測量して精密なる再檢ニ從事
し竟ニ十五日ニ至て事定れり

是より先第六日ニ甲必丹「アダムス」ハ條約を「サン
トヰフシ」及ひ「シントフランシスコ」共ニ米利堅の地名也ニ
致すとの為ニ「サラトガ」号せる艦ニて発しい
至○第十四日ニハ諸艦挙て下田の港を指て発
帆し第十六日ニハ「ポウハッタン」及ひ「ミスシッピ」
も継て來れり

此海岸多く然ることとて此日も霧深かれハ大
なる冨士の山及ひ此を繞りたる諸山の麓ハしき

景色をハ此度ハ言ふことを得ざりき〇十時に向ク
として眺望の内に西南四五里許に大嶋といふ
嶋を見得たり平常も能有得ることの如し其
嶋の高くして連山の大脉と覚ゆる処に白き烟
の満ちて間断なき運動に依て堆くして移らず
自ら纒繞する如くにて終に遠く蔓延せり〇吾
ら徒大嶋へ近く毎に恒に此を見たり故に人皆
以謂此嶋の地形全く火山の断片にして恐らくハ
氷國上の山の如き者なりと〇十二時に向くと
して伊豆の周圍明に見ハれたり而て我艦大抵

二時の間ハ海岸に沿ふて終始艦の両方へ鉛を
下し精撿し以て運行したれとも四十「ハーデム」
の間ハ一も海底を見ることなし〇伊豆の南ハ全
く北より南へ斗出せる半嶋なり而て大半ハ高
山にて覆れたり其海濱の高千「フート」以上の嶮
岨なる岩壁截るが如く海より直立する者多し〇
其内又屢ヽ平地を見るより或ハ海の表面より千
「フート」も高くして更に猶高き山巓の或ハ荒蕪
之或ハ禿露する者に依て提まられたり〇然れ
とも他の所ハ之と異にして池若くハ川ヿ穿ち

通せる緑りよりして愛するに堪たる谷あるを見
し而て其郷邑及ひ村落ハ緑りなる天鵞絨に真
珠を貫ろ糸にて繍せるが如く平原若くハ曠野に
横連り〇數多の漁舟ハ常に翠にして深く大な
る海に生類を漁猟し而て奇異に構造せる日本
船ハ其黒き梔と粗らき帆よりて貨資を此より彼
に運輸せり此諸船の一ッに近ッきし時に奇異
なる火船有て新聞を好む吾黨の駭異せる一ッな
り而て此日日本船拳銃射の距離ほと我か後り
へに過き行きし比ひに其男布を揺り廻らし吾

方へ手にて礼をなし笑て嘲謔せし不幸にして
此船中学士「ウヰルリアムス」なからてハ誰も其語
を會する者無りし
此地ハ續なる嶋の南へ斗出せる陽にあり伊
豆といふ岬に近き所に下田の港あり〇其港廣
き鉢形にして人の其内に入来る処の外ハ四方
美なる丘状の地形にて圍繞せり或ハ高百「フート」
に至れり其海濵ハ吾か最大なる艦すら岸より
鳥銃発射の距度に砲を下し得るほとの嶮岨な
り〇此鉢形の地の西北の尾に一ッの谷あり其闊

す概するニ英吉利の一里とす下田といふハ邑ハ大抵一千家許ニてふき川の口ニあり須より稍壮ニ方り第二の小邑あり柿崎と名く此処ハ察するニ大抵五百家許あり

此小(サキ)川及東より来る池よりして其水港内へ十分ニ流注せり大風雨の時ハ高き丘ニ依て諸艦を護するニ足る但し風南より来る時ハ然らす○此時も港内の水ハ毎時能く然る如く稍動揺すれとも舩の為ニ危きなとの十分なる事ハあらす且此地ハ軟(ヤハラ)かなる淤泥なれハ愈々其碇

を能く喰止むへしとす○海灣の中央ニ當り水中より尖り立る巖(イハホ)の抜き出たり而て之を諸方への距度を測るの標尖とす條約ニよれハ亜墨利加人英吉利法の周圍十里内ニ於てハ唯彼邦の法度ニ服従すへしとす○然れハ此地今よりして吾か日本地ニ於て南方の港とす

此所ニて第一ニ行ひし所作ハ港を精密ニ測量する事なり○殊ニ切要たるハ直チニ海岸ニ沿ふての水路ニ就き精密ニ海圖を選することく而て海中の沙脊及ひ其他の物即チ其一ツなる暗礁港

の西側に沿て屈曲し大抵十里許海底に蔓延し
而て之を知らさる船にハ甚危難に及ふ者の如
きを正當に圖記する事となり○余も此事に臨ん
てハ好んて其部中に属せり是レ安全なる海路の
在る所によき標を定著するハ実に切要なることと
なれハなり○此に續きたる岩の尾極めて大なる
周圍にして少しく屈曲せり大風雨の日にハ漁
師此内に其舟を以て寄居する所とす○加之此
狭き間隙に草の生したる所あり其上に小キ銭ヒト
傾きたる龕あり余其中に磁器一二小キ銅鉢二ッ

小佛像一二及ひ銅銭一文入りたる供盤の有る残
見たり是漁者の献せし者なること疑ひなし而て余亦
是に一二の小キ亜墨利加銭を加へ置きし○此羈
行にハ吾艦皆恒に三日の水及ひ食料を備へたり
是時として大風雨の日に逢ふることを得さる
かためなり○人毎に各自の務をなすへきことに
依て余亦終に至り多く学ひ得たる事あり○
描圖家の測量と航海家の測量ハ其法大に別あり
とす描圖家ハ万事を大抵器械に依てなし航海
家ハ動揺せる舟中に在て羅經及ひ量天儀を以

て測量術の無二の具となし且ツ悪キ風雨の日
にハ愈労すれハなり
下田といふ小邑ハ江戸大坂都(ミヤコ)(京都)長崎等に比す
れハ言ふに足らさる所なりと雖其出ス所佳好
且ツ新鮮なる物品鮮からす○全街皆正角に區
畫せり而て其終る所牆を設け而て晩に至り之を
鎖せり是夜る事を誤て街閭に騒擾の起るを防
くためなり○街市の中間に於て歩行する人のため
廣六「フート」高半「フート」の能く甃せる路を設く
り○其家ハ大半樓有て其法則として街の方ハ客室

を設たり○商家の如きハ此処ハ直に店を置て
其潤サ家と同し○尋常の人の住樓ハ是に異にし
て前廳の類ありて其次に室あり一對の矮柱あ
りて廳より高し而て此処にて人の尋訪を受け
或ハ瑣屑の事を成せり○其前廳ハ唯磚にて甃
にせり然とも其他の室ハ日本一般の室のことく
藁席を布きたり其藁席ハ其主人の貧富に從て
多少華麗あり○其最好の房即チ華室も其内に
新しき藁席を布あり多くハ正室(ホヤ)の後に連り而
て常習として閑朗なる場地の眺望あり或

ハ富厚なる人の如きハ亦能く珍奇なる園庭に小き池ありて其中に金魚の游ぶあり○庖ハ多分別に構へたり或ハ全地小き者ハ最距りたる隅にあり商家及ひ土人ハ木にて作り色澤を施さゞる住家の外に名白色にして火力に堪る石灰を以テ塗り或ハ石及ひ瓦を覆ふる土蔵を作れり然しとも住家ハ都て藁にて葺なり○秋等の考にてハ住家の窓及ひ戸ハ支那の如くなるをも倣へす且襖禰(ヒヤウブ フスマ)ハ又全く別製の者なり而て襖禰も窓及ひ戸の樋の中にて上下する如く其場の都合に従

て或ハ右に開き或ハ左に開きて尽く各室(ヒトマヽ)を相通し雨戸をも亦都合に由て左右に開闔するなり○動揺する障子ハ外縁を大なる木にて造り諸処に紙を張て硝子の代用とせり夜中又ハ寒き天気にハ障子の外を板戸にて閉るなり○太陽既に没すれハ木にて造り油紙にて繞り其外内に平なる皿を居へ紙の心を浸したる大燈籠に火を点して室中を照す○諸人の考なる如く家の結構(コシラヘ)麁略なるを以て火災を起し易し予江戸の内海に休泊せしに一時に諸処に

火事を起し火氣天を焦して日の暮ること之ゟ
為に避きことあり日本人等夜間交番し且諸の
術を尽して務て此火災を防きまき小き村落にて
も番舎の類を設け火用の桶梯子火鈎加之單材（ニノガル）
の龍吐水等を備ふれとも此諸器尚未々滿備せさる
なり大なる街衢及ひ大なる場所にハ自ら此番舎も
多く番人も亦常に少なからすして火事の号を
吹くと出行て火を防くなり
舎屋にても又街衢にても大に清潔を好む街中ハ
毎日必す一度ツヽ掃除を加ふ又毎人日々一度宛

入湯するを以て常と為貴人ハ各其家毎に浴室（ユドノ）を
設け下賤の人ハ通用の街湯に行なり然れとも皆頗
る熱き湯を用ゆるを以て其皮膚堅硬且粗造に變
す予始て日本人の入湯するを見し時にハ大に驚
きて実に此人いかなる病患を生するや知ること
能ハさりし入湯する人ハ水を盛りたる大桶の中
に投し濃氣蒸氣にむされて其色恰も煮たる鰕（エビ）
に髣髴たり桶の下にハ他人火を燃して微火を
絶さしむ○清潔を以て己か勤とする人に前て
「キリシテンドこ」の初時より信者あることを考ふる

人あるへし○浴湯の熱きこと予等一秒時も其中
中に手を置こと能はす然れとも此湯に投し恰
も煮らるゝことくなるを敢て苦ともせす且吾等
か眼前に居をも憚かりなきと見へたり其故は
久く熱湯の中に浴し全く裸体にて入出湿りたる
躰（カラダ）を拭ひ乾すを以てなり
通用の街湯に於ては各人少許ツヽ其熱湯を灌ぎ
とも各小桶を得而して後に敷石の上に坐して
身体（カラダ）を洗濯し餘れる水は敷石の中央に在る樋よ
り流れ去るなり終りに至て復熱湯の中に入里

衆人相通して大なる樋の中にて同し湯を用ひ同
し室に投し老若男女少婦少年互に異人の如く親
むことなく手巾を用ゆるなり加之裸体（ハダカ）にて外國
人を恥る心情なし実に野鄙の譏りを免れす○
予か此処にてみれは婦人等急に湯中に投し或は
手の位置（オキヤウ）に由て必す其陰部をあらはさゝる得さ
るなるへし
日本人の清潔を好むに反して鼻神経（ハナノウテ）を侵す悪
臭の堪へかたきあり即ち日本人は田畝の肥脂（コヤシ）に
両便を貴ひ用ゆるを以て舎屋の中のみにて非ず

街角路傍及ひ稍隔りたる地ニ大なる桶を構へて両便を洩し且動物植物を投す是れ街衢を清潔にするニ似たりと雖も此樋の邊を通行し又両便ニ行ときハ鼻を其臭氣ニ觸るゝ事を免れ難し舎屋の中ニても亦大小便の為ニ設る小なる両舎あり其一舎ニハ樋の中ニ通する漏汁を設あり又一舎ニハ長一「フート」廣半「フート」の穴を穿ちて大便を排泄せり又別ニ小舎を構へ其中ニ必す清水を小桶ニ盛り貯へ傍らニ手巾を備是ヲ以て日本ニてハ此便舎ニて臭氣を受ると雖歐

羅巴の街衢路傍ニて屡眼ニ見る汚穢を免るるなり山の麓及ひ街坊の端末ニ大なる堂宇八個あり此堂内ニ諸人教法脩行の為ニ設る室の外ニ尚他の小舎ありて或ハ僧徒の使用ニ供し或ハ此堂ニ住する貴き旅客の要務ニ供ふるなり此堂の一字を予ろ工作場とす其比隣の庭を「ムル」(官名略)「ブロール」氏の物影を写真する所とす僧徒等常ニ此工作を工夫を費して撿査し無數の看客も褐(チヤ)色なる木造りの箱より凡百の畫像の顯れ出て其迅速なると其釐正なるとニ驚

一のざるハなし
諸人の教法を奉信する為ニ立めたる処ニ廣き
市廓あり其机の製作支那及ひ印度の机と異な
らす其上ニ花瓶を載せ常ニ蓮花を飾り香炉及
「カンテラフレス」詳未を備ふ机の左ニ篋(エツツハ)机あり其
上ニ青銅にて造りたる二個の鐘を載す其小な
るものハ大なる者より高きこと「コイニト」尺ニ名
して各木の桴(バチ)を備ふ鐘の音聲ハ美ならして実より
又此篋机の左ニ尚篋き書机ありて考帖(キヨハキン)三冊を
載す此書机の古側ニ横径(ワタリ)大約一「フート」半の木

丸ありて横側ニ切込あり多くハ赤色ニ塗り金
箔を貼す○住僧日出と日暮ニ佛前ニ拜跪し此
小机の上ニて先大鐘を打ち臭声を出して讀経
し木丸(木魚を云)を鳴し大鐘と木丸との際ニハ小鐘
を鳴すなり寺ニ参詣するものハ机前ニ拜し絶
へす手中ニ珠數を捻す既ニ寺を去らんとする
ニ臨てハ箱の中ニ少許の銭を投し或ハ米魚及
ひ其他の食料を寺僧ニ与ふ○此教法尊敬ニ於
てハ愚蒙なる勤務及ひ支那の如き妖術ありす
して実ニ拜敬するのそと見へたり

日本行紀

第二十四篇

下田

其二

日本婦人同く風習

婦人の衣服ハ踝まて及ふ長き裳をたれて廣く
且重き袖あり此衣裳の前ハ開きてその終りを
重祢廣き帯を以て結ふるゝ帯ゝ甚く低くたれ
て胯に至る間に又袴の下に及ふあり〇鎮坐し

てある時にハ右の如き下衣の類にも能く身體
を覆へども少し速に往来せんにハ間に全く胸部
を顕し加之脚部も少しくハ見ゆるなり是故に
貴き婦人ハ又止むことを得ば静に小足に歩まざ
るを得ざるなり○冨家の婦人ハ多くハ數襲の
下衣を重子服し其長き者ハ脚部を纏ひて歩行を
妨るに至る且別に「サンダール」と唱ふる
履あり坐板の下の高サ三「ドイム」より四「ドイム」に
歯二枚を備ひたる緒を用ゆ此履も甚動揺して
歩行に便ならず

貴家の小婦を見しに多くハ盡く其衣服を後よ
り前に引て強く両膝の間に纏ふを以て歩行せ
さハ両足にて大約半輪ならざる事を得ざるな
り帯ハ多分美麗なる者にして大約廣サ一「フー
ト」に至る此を廣く且長く腰後に結ぶとなり其
品の善悪ハ主人の貧富に随て高價なる彩繡を
以て飾るあり或ハ銷劣れるもあれと帯ハ婦人
の装飾の甚尊き物なり日本の婦人の其髪多く
ハ黒色にして甚柔なり予ハ赤髪の小児に二人を見たり僅此
髪を前後両鬢よりあけ頭上の中央にて大約三

指方に束ね寛く且満圓に結へとも其形ハ髪の
長短多少に由に一様ならず○支那の婦人の如
く頭を頭上に束ねたる時圓く且ちるく見ゆる
様に糸或ハ紐にてハ結ハさるなり揥ハ木にて
も造り角にても造り又富家ハ鼈甲にても造り
且簪(サンサシ)ハ金銀銅鐵真鍮のるい硝子角或ハ鼈甲の
るいにて製し此を以て髪を能く固むるなり○
佳辰良日にハ又頭髪を全く「チットウルキ」綱のごとくちり
たるものを以て飾り必ズ絞り滌を用ひ多くハ赤色
を用ふ又此を以能く頭上を覆ふをなり

予が請に由て下田の鎮臺より撰ハれ六人或ハ
八人の少婦を美麗に装ひたるを見ては何きの
少婦も美麗なれとも中にハ他國にも少からさ
るあり予が言語を通せる達の助のいへしにハ
下田の如き僻地に美人ハあらされとも内裡の
ある帝都にハ甚た多しと此少婦等敢て物に怨
き悍る色なく予等に衣服を見せしめ且予慶恕(イカ)
るゝ色を顕ハし或ハ感したれとも其為に嘗て
怨怖(フ)○形貌なし少婦のなしたることハ其親ミ
を以て鎮臺と出坐の官士を愛敬せる礼を施し

たり然れとも船中の人ハ一人にても免許を得て自在に礼を述ること能ハされは茲に又寫真の画像を見る為にハ大約百人も来りたり

日本人の進ミ聞せさる證拠の為に今茲に日本人の手札を出せり然れとも此手札ハ我か本國の如く雅味もなく紙も麁製にして草木ハ髄にて製し薄き小切に記せるなり

斎藤壮之助飯田敬之助松村源八郎堀達之助旅客の説話せる有名の茶店ハ下田のなきと見へたり予さらにかれを見さりし〇日本婦人の一般の風習ハ聞けるに我か本國の華麗及ひ支那婦人と均しく醜くハして異状なり日本の女ハ彩色を施ス画象の絹なとを塗ることく其顔色を粗末に装ふなり而ち通常の真珠末に均しき白き粉末を用ゆ〇尚且其唇に色料を施して黯赤色を得せしめ又他の色料を用ひて濃き黯赤色になせる具あり平人の女ハ通常上に亦色料を施して止む唯高貴の女のミ此色料に尚ホ赤色の粉料を加へて其頬にぬるといへり〇既に嫁したる女ハ上の色料を用ゆるのミならす尚全く

眉毛を落して又其歯を黒色に塗なり歯に用ゆる具ハ居鉀の礬く灰白色の者を大約三「ダラクマ」究紙の小片に包ミ処の粉末なり「ドニヘルシ」氏ハ此粉末を鐵粉「サキユリーニ」の三味にて製せといへり実に此三味なるや否やを志らば予ら考ふハ腐蝕性の「フンバラード」薬名なるへし其故ハ一人の水夫之を試ミたるの八日をへて口中高浮腫し歯齦(ハグキ)之か為に侵蝕せられて其歯盡く落人となるに至れり

男子ハ盡く其頭上の髪をそり残りたる毛を三「ドイム」より四「ドイム」のかなる馬尾の如く束て前頭の剃られる上に横へ置とらへる事と寺僧の全く頭髪を落せる事とハ男子の衣服の条に載せたり○小児ハ頭上の彼是のそこに髪を残し其他を剃るなり又或る小児ハ五六箇処に髪を残し置て此を小さき馬尾のごとく束ね復之を頭上の中央にて結ふなり然れども又此馬尾に均く束ねたる髪の外に前頭の上に至り直線に眼の上に及んで切たるを見たり

他宮にて屢繪の有を見たり此繪の訳ハ下の有

○女の心臓を以養となせる鬼あり一度過度に是を用ひし夫よりして三人の雄臣と強勇なる諸侯として是を代に至れり○此人等一度高き山の頂に至り拝をなれ神隠遁の老人の形となり二の酒器を此人々に与べし○今彼四人は「マルスカラーム」此（細工物を箱に入れ此箱を首ニ掛ケて歩行をなせる者なり）の形に変し高き処に趣く此人等通を知られ婦人河に衣を洗ひ居よるに導きせらる○爰に於て彼等宴を開き鬼に酒を無理に進むるの謀にて幸ひに鬼の首を代○此場にて勤の為に居る小さ

青色にして髪の紅き処は尤着し（按するに源頼光公公時綱貞光酒呑童子退治の額なるへし）他の額は女の成立を図書して甚信心の心含めり○種々の小児鎗を以つて飛事の稽古をなせし彼の内一人飛損して鎗の光を身に突立て傷を生し是よりして彼男子女となる数多の社に大なる銅の鐘懸ありおれに藁にてらりたる紐の下りたる有此紐を強く引拝を而して目前に拝する者の有を神に知らせる為なり此懸よる紐の多少にて社も亦貧福あり僧の衣は綃縮緬に似てよく襞積（サイノヒダセ）しものなり色

か都て同しからは黒萠黄青黄及ひ桃色等なり
又務の幕ハ左の肩より右の腰に掛る衣を着け
按するに袈裟なるへし 又帽子ハ或國にて大なる祭りの節
冠る如きものに似たる帽子を冠りたる僧を見
たり此君か本心を失ハてゐる呑物 按するに酒なる可シ 及
他の貴を厭ハざる様子なり推考するに一杲切
の人と見ゆ○此人何れも酔酒なるゆへに能知
たり○就中此人小児をあつめ憂は獨是に拘ら
は續次にあり
或日我佛を再拝せる両人の尼を見より此尼の

頭ハ僧の頭と同しく剃去し黒の衣を着せり其
一人ハ老年にして児を脊負ひたり此尼ハ人を
迷ひに導き且已の身を男に織さしめて金を得
是にて世渡りの助とせる者も日本人に在へり
我測量濟し後図書をなるに暇なし然れとも明け
なハ狩に至り鳥の毛を集めよく思ひしかハ休
息しぬ扨明日に至り狩に出英吉利の里數にて
稍六里許り川にそひ歩行して谷を這入り山に
登るに山の際に僅の家屋したるあり此邊近く
にて乞食の僧日本の繪を彩色したる箱を首に

懸れり是に人々此三の食物を与へしに彼ル珠數
を早く摑し我まて金を与へしに躰を殊く曲げ
拜して珠數を手の間にして摑し是ハ我拜の好
き志なるしるしなるを顯せし死左にあらされハ此拜
ハ何の為なるや欲不知然ルとも我綺麗なる山
鳥を射得さるハ此拜の德たる事明白なり○彼
等ハ各のあちこちに蔭なして小屋作りして集まり
居たるを後まて見たり
此日ハ霧深く朦々たる天氣にてありし雲の脉
にて兗したる丘陵の二千歩許なるを見たり已

に久しく山鳥の鳴けるを聞といへとも霧陰に
て見へにハ明に傍近く來る事を得すまさ此鳥の
餘り綺麗なるに驚き暫ハ射心も失なひし然ル
とも終に好き犬二三疋を放ち心の侭「トセイ三」
「トセイ三ハ物數十二をいふ皇國の一抱なり」を得たり○通例此國の
山鳥ハ目の縁ハ赤く首及ひ足の上の方ハ濃薄
黄の色にして金色を帯たり肩の上の方ハ蒼色
様なる銀色なり我得たる二ツの鳥の稍掛目十
五斤位の善鳥なりまた山の頂にて見たるハ多
分雄鳥なるへし　雌ハ木に寄り卵を加へをなり

かく得物ありしハ我堂か幸なりし
此山深く食料の牛澤山あれハ居ならひの牛ハ
荷鞍を置物を負ハせるを以て尊むへ毛ハ稍
満足し津そ脊ハ高くなるなり我屢「キニシニク
カラーフル」地を掘て廻るものをいふに逢し是ハ價なも成
らざる木の根を尋ぬるものなり
土地の「サルミ」山ハ「アルヘ三」是ハ「フランスイタリヤドイ止」にて最
る高山に多く似より只相違なりハ牧なくして繁
りたる草野あり遠近に岩横のり此岩の間には
「ベミ」とハいちごと唱ふ草の実なり西國邊のあり是山鳥の食と

も二三日後「ロイテナント」舘「ベント」名人及ひ「ミコ
ルソミ」といへるもの誘ひ狩に出ぬ此日天氣少
し曇りたりしか後にいたりてまたく清く晴
わたりしハ多の小鳥煙立登る大嶋の噴大山等に
れ海邊にハ麗敷岩濵豊饒なる青き谷其後に突
立たる山等清く見へ渡りたり誠にうるはしき
景色を顕せり加之冨士の項ハ雲を貫き頂にハ
雪積りたるハ尊むへし此景色の我を驚かせり
我此日綺麗なる尾をもてる山鳥を射損せり其
後日本人より求め得たる鳥の鎧たる羽の色に

く逶迤りたるを引拔し此色「コーヒーレ」より出
る赤き繪の色ならし銀色を帯ひし尾の長き事
凡二尺餘にして身働きするをにさも愛てしく
動しける甚物惣する鳥なれは毎度見るといへ
ともに終に射得ざりし
我等終日狩し労に及ひしかは村長の家にて夜
を明さんと談せし然れとも此家の人いと恐れ
頻りに断はり頼ミしかは月影にて下田に帰り
し此いさるいの代りに白き狐をあつるひし是か
我常の銅置く赤狐よりか半分の大サなり

市中外のある寺に至り寺僧に旅宿を願ニ承知せ
し頃は夜四ツ半頃なりし漸して皆寝に付し頃
凡二十人許りの武士部屋に来り我々を船の返
さんと労し手を盡せていへとも帰らん空しく
あらしかは帰去し赤四半時過て日本の通詞と
武士再ひ来ルり先「ロイテナント」の「ベント」名人言
へるは夜に至りしかは無拠休息し明るを待る
りと云へり然れとも日本人は猶無理にして眠
りを妨んか為桃灯沢山部屋内に持来りし此時
猶「ベント」は通詞と對話し居たるに一人の武士

我輩ニ近く提燈を差附提燈のかさを以て強く
摺付怒を引起せ「ロイテナン上」官名「ミ・コルリン」ハ
外の者ニ取掛り日を廻せ程蹴倒せ如斯騒動を
起したり「ペン上」人名君ハ以前ニ筒ニ玉込たり我
等も差置たる二挺込の筒ニ玉込けれハ日本の人
一声高く吁ハ早此処を去りぬ暫騒動止しかハ
妨けるく朝まて寐ぬ朝ニ至り船ニ帰りし
此盡後二三人の日本人来り應對をも然れとも
不請して此夜発さる儀を裏評して後「ロイテナ
ン上」官名の「ペン上」人名此者ハ「カピテイン」官名アームス

人名帰帆の後ハ「セフトコアンストック上」の官たり依
之一子の「カピテイン」官名並司令官等打揃へ奉行
の黒川嘉平方へ至り此人をより昨夜作りし一
件の始末をなせ叔此一件ハ昨日取押ニ参りた
る武士ニハ罪なく然し此者ニ罪を負セり「ロイ
テナン上」官名此奉行ニ申聞るハ昨夜我等の士官
ニ疵付られしるハ誠ニ賤ためし仕方なれハ休
息を妨し者を此方よりも人數遣し召捕江戸ニ
送り且條約ニ疵付し段申述へ江戸表ニて相應
の罪ニ行んといへる「コムモドレ上」官名の心なれと

も我々中に立先此儀ハ止る迄に申成たり然れ
ども斯の如き事今一度是あらバ免し難しとい
へる事を添たり元日本人より事を起し復ひ日
本人より免を願ひし是にて事果たり
五月十三日早朝下田の「スター子比に移る○晴
天にして四方を詠るに四ツ時頃砲銃の届く許り
な大島を見る此嶋の頂に羅あると見ゆ且頂上
より常に白烟雲より高く立登り黒くしてさも
すさましき氣なり赤き薄き灰色の筋切もなく
立別も海濱迄なひく其他ハ涼々として草木生

繁り僅の町又ハ村あり一方ハ八山(ハケヤマ)又一方ハ高
く木陰もなくして実に図書もへき景色なり盡後
亦「キン」之岬に至り暮に「ブラン」己岬に至りし此
西岬の深浅を度量なしに盡く相違あらし